

---

# 青紫の太陽

奈山亜紀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

青紫の太陽

### 【Nコード】

N84640

### 【作者名】

奈山亜紀

### 【あらすじ】

円筒の形をした洋館。ドーナツのように真ん中は繰り抜かれており、その空間には廃れた中庭がある。当然そこから上を見上げれば青い空が見えるはずだが、実際に見えるのはデフォルメされた青紫の太陽が描かれた天井。青紫の太陽がこの洋館に蓋をしていた。外はいつたいたいどうなっているのだろうか。少年少女達はそんなことに思いをはせながら洋館の中で暮らしている。

## 青紫の太陽 1

卵を落とした音に似ていた。質量がありながらも軽く潰れる殻の音。卵の音。

耳をすまさないと聞こえないような些細な音だった。それでも静まり返る図書室でクロツクの肉が館の地面に押しつぶされる音がしつかりと耳に届いた。最上階から飛び降りて体中がひしゃげる音。

この館へ来た当初クロツクの飛び降りる音に身震いを起こした。それほどその音は生理的に避けたいものだった。けれど慣れとは怖いもので今では無意識に反応することすらしない。

クロツクの身投げは時計の役割でしかなかった。

そんなクロツクの潰れる音を聞き、僕は名残おしいと思いながらも読んでいた本を閉じた。そして隣に用意していた本を積み重ねる。「どうした？」

ペンが声をかけてくる。

「クロツクが落ちるころに本を届けるよう言われているんだ」

右手に持ったペンを回しながらペンは大げさにため息をつく。

「彼女は君にそんなことやらせているのか。それならここへ取りにすればいいのに」

「ペンの顔を見るぐらいなら潰れてぐちゃぐちゃになったクロツクにキスした方がましだっていつも言ってる」

「僕も随分と嫌われたもんだな」

自嘲気味に笑うペンを横目でうかがいながら僕は持ち上げた本の表紙を見下ろす。どれも医学や人体について書かれた本のように、専門用語の並べられたタイトルから内容をうかがうことはできない。知識の量と比例するのかどの本も分厚く、それなりの重量があった。僕には一生縁のない本に思える。

「思い出せば君が来てから彼女の顔を見てないな。顔を合わせれば口論ばかりしていたけど今ではそれが懐かしいよ」

「僕が来てからそれほど経ってないじゃないか」

「だからさ」回していたペンを止めて掌の上に顎を乗せた。「余計にそう感じるんだよ。いつもなら三日おきぐらいに仕方ないような顔でやってくる。その時の口論が僕は楽しみでしかたなかったんだ。どうやってたら彼女の怒る顔が見れるのか。本を読むのに疲れたらいつも考えていたからね」

「そんなことしてるから嫌われるんだよ。もう少し仲良くしようとか思わないの」

「いやいや、それが彼女との正常なコミュニケーションであり、怒りながらも彼女も内心では楽しんでいたと思っていたんだよ、僕は」  
「致命的だね」

重い本を抱え足で椅子を机の中に押し込んだ。古美術品とも言えるほどきめ細かな造形をあしらった木製の椅子だがここでは椅子以上の価値はない。

同じように芸術的とも言える幾何学模様彫られた扉を蹴破るように開け、僕は片足を扉にひっかけて振り返る。

「ふと思っただけ。そんなに楽しみだったなら、自分からウォーターに会いにいけばいいじゃないか」

「それもそうんだけど」ペンは珍しく言葉を濁した。「何というか落ち着かないんだ、ここにいないと。椅子に座って本と向き合う。それ以外の姿勢はすごく違和感がある」

「でも、たまには外に出た方がいいよ」  
「気が向いたらね」

僕の知る限りペンがこの図書室から外で出たことはない。別に彼が外にでない事で何か問題があるわけではないが、やはり多少は運動をした方がいいと思う。

それがウォーターの使い走りだとしてもだ。

廊下に出て赤い絨毯を踏みながら歩くうちに本を持つ腕が震え始めた。一度内窓の近くにあったテーブルに本を置く。人の事は言えないなと内心思いながら、手の筋肉をほぐしつつ内窓からウォータ

ーのいる中庭を見下ろした。

中庭は緑に覆われ道になっている白い煉瓦や休憩所の白い屋根がよく目立つ。その白い屋根のある休憩所にウォーターはいるわけだが、それよりも端にある赤い染みが目にいった。

白い煉瓦を敷き詰められた道の上で、面白いほど体を自由に折り曲げたクロツクが転がっていた。遠目で見れば白い石に描かれた大きな花に見えないこともないクロツクの肉塊。趣味の悪さがうかがえる不気味で大きなラフレシア。

屋根が邪魔で見えないがウォーターはきつとぐちゃぐちゃになったクロツクを見つめながら趣味の悪い笑みを浮かべているはずだ。

その姿が容易に想像できた。

階段で転ばないよう細心の注意を払い一段ずつ確実に降りていく。数冊程度なら何の造作もないだろうが、胸元まである本の束は僕の体重の三分の一を超えている。歩いているだけですら足がおぼつかないというのに、階段を降りるとなると重心を探すだけで頭がいっぱいになる。

そもそも明らかに数日で読める量ではない。これは僕を苦しめるために用意されたウォーターの嫌がらせだとしか思えないのだが、それを問いたただす勇気も僕にはない。

必死になって階段を降りていると一階に着く手前で初めて見かける子と遭遇した。

両手に頭をうずめ階段の端に座り込んでいる。そこらでうずくまっているブロンズと同じように僕と同じほどの年齢に思えた。

ブロンズ、と僕たちは彼らの事を呼ぶ。言葉を話すことなく、どこかここに座りこみ頭を抱えている。

その姿は銅像の考える人に似ている。そのためにブロンズと呼んでいるのだとペンに説明されたが、僕からすれば考えるというよりもムククの叫びのようににしか見えない。

声をかけても返事があった試しはないので僕もそのまま素通りする。微かに魚に似た生臭さが鼻をつき何の匂いか気になった。

中庭に続く幾何学模様している扉を蹴り開けると油なんてさして  
いないであろう扉は鉄がひしめく嫌な音を上げた。

澄んだ空気が館内に入ってくる。緑の色が目の前に広がった。中  
庭は館内で唯一緑がある場所だった。緑と言っても手入れのされた  
上品なものではなく、放置された公園のように好きなように草木が  
はびこっているだけだ。土に埋め込まれた白煉瓦の間から無作為に  
雑草が生い茂っており、中庭にある休憩所だけでなく館全体にもま  
んべんなく蔦が絡まっている。

廃れた庭園という言葉がよく似合っていた。もちろん癒しなどと  
はかけ離れており、どちらかと言うと不気味さしか残っていない。  
それでも館内の無機質さに比べると中庭は確実に生きていた。

「ちょうどいい時に来たわね」

バランスをとりながらふらふらと中庭を歩く僕を一瞥してウオー  
ターが声をかすかにはずませる。彼女は休憩所の欄干に肘をつき眠  
そうな目をこちらに向けていた。

「しばらくしたらクロツクも起き上がるころよ。早く本を持ってき  
て」

「いい趣味だね」

クロツクのことだ。それを聞いたウオーターは不敵な笑みを返す。  
休憩所の床を埋め尽くすように本が散らばっているその上ベンチと  
欄干にも建物のように本が積まれているためほとんど空いているス  
ペースはなかった。面倒だったので適当に本を降ろす。持ってきた  
本はすぐに崩れそれまでにあった本と区別がつかなくなる。

それを見てもウオーターは怒らない。本も本以上の価値はないし、  
ウオーターなら今まで読んだ本と読んでない本は区別できるのだろ  
う。きつと。

だるくなつた腕で手前のベンチあつた本のタワーを崩しそこに腰  
をかけた。両隣りには僕の座高より高い本の山ができており多少窮  
屈ではあるがさしあたって問題はない。これ以上崩せば帰るとき大  
変になる。

「言われたとおりのものを持ってきてくれたのね、嬉しいわ」

「どの棚の何列目まで指定されたメモを渡されたら誰でも分かるよ」  
こちらの話を聞いているのか細かく頷きながら一冊ずつ届けた本を眺めている。

手持無沙汰になった僕は隣に積み上げられている本を眺めた。タイトルを上から順番に読んでいくが、やはりタイトルからでは何について書かれているのかさっぱり分からない。とりあえず一番上にあるものを手に取った。

その表紙には鮮やかな青い蝶々の姿が描かれていた。黒い背景に羽を広げた蝶々は標本のようで全く生命を感じられない。蝶の輪郭を指先でなぞる。触れるのはやはり紙の質感だけで、凹凸の質感さえない指先に不満が残った。とくに期待もせずその指先こすりあわせたが鱗粉の感触はない。

「変態つて分かるかしら？」

突然の問いかけに顔を向けるといつの間にかウォーターの視線がこちらに向けられていた。皮肉を言うような意地の悪い笑みを浮かべている。

「言葉ぐらいは知ってる。確か他の形に変わることだ。青虫が蝶々になるみたいに」

「まあ、それも正解の一つね。正式には幼生が形態、生理、生体を全く変えて成体へと変わることを言うの」

「それがどうかしたの」

「あなたの今持っているその本がそういう本なのよ」

ウォーターはそう言って僕の手元にあった蝶の描かれた本を取り上げた。彼女は僕と同じように蝶々を指でなぞってから愛おしそうに本をめくっていく。

「ところでロープ、うねうねした毛虫がどうやって蛾に変わると思っ？」

どうしてわざわざ蝶ではなく蛾を選んだのか訊くのをこらえる。

「蛹になってそこで蛾になる」

「じゃあ蛹の中でどうなるの。まさか蛹の中にいる毛虫の背中が割れて、そこから出てくるなんて言わないわよね。それなら蛹になる必要がないでしょ」

そんなことを考えたことがなかった。

確かに毛虫がどうやって蛾の姿になるのか僕にはさっぱり見当もつかないし、その過程は想像の範疇を越えている。人ならば子供から大人になる。背が伸び、手足が伸びていく。順当な成長だが毛虫はどうなる？ 体がしぼみ、六本の足が伸びて、羽が少しずつ生えてくる。そういった退化のようにも思える進化が蛹の中で行われているのだと考えると釈然としないものがあつた。

「教えてあげましょうか」いやらしい笑みをつり上げてウォーターは口元を歪ませた。「蛹になった毛虫はね、中で一度ぐちゃぐちゃの液体になるの」

それを表現しているのかウォーターは両手の人差し指でぐるぐると空をかき回した。

「体を全部とかした毛虫は蛹の中で蛾の形に体を作り直す。そうね、人間で考えてみたら気持ち悪くていいわよ。繭に入った人は眠ったまま体が少しずつ解けていくの、皮膚が爛れてそのうち赤い肉が見えてくる。その肉も腐食していくようにでろりと垂れて、最後には水あめみたいにとろとろになっちゃう。それから形が変わっていつて目を覚ましたことには自由に飛べるようになってる。どう？」

「気持ち悪い」

ウォーターはそれを聞くと満面の笑みを浮かべてから何がおかしいのかくすくすと笑い出す。何度も言うようだが趣味の悪い鼻につく笑いだった。

「そんな話ばかりして悪趣味だつて言われても知らないよ」

「悪趣味で結構。自分のしたいことができるのなら、他人なんていらないわ。そうでしょ？」

小さくため息をつく。何も言わないでいるとじつとりと向けられたウォーターの視線が気になった。



「それにしても、あなたが相手だとこっちも面白くないわね。全然反応してくれないし。そんなに私の話がつまらないの？」

「そんなことない。ウォーターの話はあまり気持ちのいい話ではないけど、なんというか、すごく興味深い」

「そう」

不機嫌そうな声だったが満更でもないという顔をしていた。

「そうだ」僕はできるだけ自然に話を切り出すように言った。「ペ  
ンがウォーターと話がしたいだってさ」

「それはご免よ。何度も言ってるでしょ。ペンと会うぐらいならク  
ロックとキスした方がましよって。あなたは頭にウジでもわいてる  
のかしら」

「クロックとキスしたいのかなと思って」

「あなたの冗談は面白くないわ」

先程の感情溢れていた声が嘘のようにウォーターは無機質な声を  
出し、冷たい視線をこちらに向けてくる。

完全に機嫌を損ねてしまったようで、ウォーターは眉の間に皺を  
寄せて本をめぐり始める。

どうしてこれほどペンとウォーターの間には溝ができてしまった  
のか。

ペンに聞いてもいつかはぐらかされてしまうので、一度ウォータ  
ーに聞いてみようと思っていたがこの分ではとうてい聞けそうには  
なかった。

ぼんやりとクロックの方に目をやる。

血だまりの中、立ち上がるうとして肘を立てていたクロックは未  
だに回復しきっていないのか、細かく震えたあと音をたてて崩れ落  
ちた。あたりに血しぶきが舞い、白い煉瓦を濃く染める。

「そういえば」先ほどの通り感情のないままウォーターが話します。

「あなたはここにきてどのくらいたったのかしら？」

「クロックが十回以上は落ちた」

「そう、もうそんなにたつのね」

十回ねと小さく呟いたあと、ウォーターは今までにない虚ろな瞳をこちらに向けてすぐ視線を下げた。

「それで、この事はどのくらい聞いているの？」

「このことと言われ一体このことかと思ったが、すぐにこの館全体のことなのだと思像がつく。」

「さあ、ここで自由に過ごせばいいとしか聞いてないかな。していうなら外には出られないってことだけは聞いた」

ウォーターが軽く目頭を押さえる。

「そんな説明で納得したの。それにあなたたちいつも図書館で一緒にいるんですよ。いつもなに話してるのよ」

「なにつて、変わったことは話してない。雑談程度。それに僕たちはたいてい本を読んでるから。話すときはお互いに本を読んで疲れた時ぐらい」

「もういいわ。ペンの逃避も嫌いだけど、あなたの危機感のなさも私は嫌いな」

「そんなこと言われても」

「あなたもそろそろ知っておくべきだと思うわ。気になるでしょ、この場所が何なのか。外への扉はない牢獄。中には同じぐらいの年齢の子たちが頭をうずめている。おまけに」

ウォーターはそう言って休憩所を出ると草を踏みしめ仰ぐように顔を上げる。

「天井には青紫の太陽が輝いている」

彼女は皮肉っぽく微笑み天井を見上げていた。まるで何かを羨望するようで、本物の太陽を見て目を細める表情に似ていた。

しばらくウォーターを見つめてから欄干から身を乗り出し上を覗きこむ。はるか頭上の天井に青紫色をした太陽の絵が描かれていた。白い天井をバツクに青紫をした丸が大きく描かれている。青紫の球体からキラキラとした光をイメージしているのである。う触手が全体に生えていた。デフォルメされた太陽。怪しげな宗教のシンボルにも見える。

「あなたはこの館に疑問を感じない？」

青紫の太陽が描かれた館。

常識を逸している館。

円柱の真ん中をくり抜いた形をしたこの館に出口はない。外に面する窓はなく、もちろん扉なんてものはない。唯一外が伺えるはずの中庭の天井には蓋をするように青紫の太陽がこちらを監視している。

外が気にならないわけではなかった。僕がこの館にやってきた当初、出口はないかと館の中を探索した。どの部屋も少し贅沢な監獄といったような部屋しかなく、たまにかくれんぼをしている子供のようにブロンズがいるだけだった。

当然すぐに飽きてしまった僕は図書室に戻りそのことをペンに報告する。上もほとんど同じだと言われ、僕はすぐに館への興味がなくなってしまった。

「空はどうなってるんだろうな」

天井を見上げたまま何となく感じた疑問を口にするると冷たい視線で睨みつけられる。

「あなたって本当に馬鹿ね。気にならないの？　ここまで徹底して外を隠してるのよ」

「そうだな、きつと外には凄いものがあるんだ。僕の予想だとこの外は宇宙で、僕たちはきつと館との形をした宇宙船で旅をしているんだ」

呆れたようにウオーターは溜息をつく。

「あなたSFの読みすぎよ。もしも、この館が宇宙船だとしたら私はいったいどこに向かっているというのよ」

「きつと新しい惑星じゃないか。地球はもう人が住めなくなったから新しい所へ行くんだ。僕たちはそれで選ばれた子どもたちってわけ」

「想像するのは自由よ。それにしても、あなたを見てると怒っているのか笑えばいいのかわからなくなるわ。でも一つ言えることは現

実を見てつてこと。とりあえずあなたがここへ来た時のことを思い出せばいいんじゃない」

少しはましだった気分が急激に萎えてしまった。

「ウオーターは夢がないな」

「夢も希望もすでに一回無くしてるから」

疲れたというようにウオーターは目をつぶり小さな宮殿の欄干にもたれた。閉じた本は太ももの上に置き、眠りにつくようゆっくりと呼吸を繰り返す。

彼女は何を考えているのだろうか。

ウェーブしたなめらかな金髪をした彼女を眺めて僕は思う。目を閉じてさえいれば人形のように精巧で繊細な彼女の表情には何も浮かんでいない。いつも喜怒哀楽がはつきりとしている分、何の感情もなく目を瞑る彼女が何を考えているのか予想がつかない。

僕も同じように目をつぶり何かが浮かんでくるかふけてみたが、真っ暗になった視界の中でびちゃびちゃと音をたてるクロックの音が邪魔で集中出来なかった。

ただ、視界が真っ暗になったときこの館にやってきた時のことを思い出した。

青紫の太陽1（後書き）

全体で原稿用紙100枚ほどの短編になります。

## 青紫の太陽 2

視界が真つ暗になったとき、この館にやってきた時のことを思い出した。この館へやってきた時も瞼を閉じている時と同様に視界が真つ暗だった。

意識ははつきりしていた。目を覚ましたというより今までの記憶をすっぽりと落としているような感覚だった。次第に記憶がよみがえるなかで、特に理由もなく手を伸ばした。指先が細やかな布の繊維に触れて掴む。その感触に自分が生きていることを実感した。

だんだんと歯車が重なるように僕の頭は正常に動き始めた。真つ暗な中でしゃがみ込み布をめくり上げる。暖かな灯りに目を細めた。ぼやける視界のなかでふらふらと立ち上がる。次第に鮮明になる視界の中、電球の下で本を広げている自分と同じ年ほどの少年と目があった。

少年は手に持ったペンをくるりと回すと立ち上がり、ようこそと言いながら手を広げた。

「ここは？」

僕の問いに彼は答えた。

「青紫の太陽」彼は言った。「青紫の太陽が見下ろす子供たちの館」格別面白い冗談を言ったというようにペンは自嘲の笑みを浮かべたのだった。

そんな彼の言葉に疑問に思うこともなく僕は呆けるようにあたりを見回していた。その部屋にはたくさんの本があった。目を輝かせていたのだろう。ペンは今までの不自然な笑みを消して自然な笑みを浮かべて言った。

「君も本が好きなのか？」

僕が出てきた場所はカーテンの裏だった。外の窓もないというのに図書室にはなぜかカーテンがかかっている。ペンから言わせればそれもまたこの館の「皮肉の利いた洒落」ということだった。

皮肉の利いた洒落とはどんなものかと訊ねるとペンは自分とウオーターが現れた場所を教えてください。ペンはいつも彼が座っている場所で本を読む態勢のままここに来た。そしてウオーターは中庭にある水場の隣で座っていたということだった。

ペンはあまりこの館のことを教えてはくれなかった。知りたければ自分から知ればいいし、知りたくなければずっとここで本を読んでもおけばいい、駄目なことは教えてあげると、それ以外のことは自分で選んでほしいことをすればいい。ペンからの情報はこれだけである。

とくに知りたいと思わなかった。なによりも本が読みたかった。

「あなたはもつと現実を見るべきだと思うわ」

ふいにウオーターがつぶやいた。詰問するような口調だった。目を開けると彼女の目がこちらに向けられている。

「彼は知らないものは知らない方がいいって言うかもしれないけど。私は逆に知らなければいけないと思う。あなたもここへ来た理由ぐらい分かってるでしょ？」

「したくない話題だけど」

「それなら他の人と私たちは違うのも分かるはずよ。周りを見てみなさい。ここにはいっぱいの子供がいる。一日中座ってるブロンズが一杯。その中で私たちは話をしている。これはきつと私たちが選ばれたからのよ」

天を仰ぐように熱弁する彼女は宗教家のようなだった。

「確かに周りを見てると僕たちの方が異質のように思えるね」

「そう選ばれたのよ。ここから脱出するべく人間として。そうに決まってるわ。これは私たちに与えられた試練なの。この難問の答えを出すことで私たちは救われるの」

いったい誰に救われるのさ。そう訊こうと口を開いたが、すぐに考えをやめて話しに乗ることにした。

「例えそうだとっても、どうやって外にでるのさ。入り口どころか外への窓もないっていうのに」

「誰がないって言ったの」

意地悪な目をこちらに向け焦らすようにウォーターは言う。

「ウォーターが言ったんだろ。外に出る扉はないって」

「確かに外に出る扉はないって言ったわ。でも出口は扉だけじゃないわよ」

扉がないなら何がある。自問してすぐに思いつく。

「……窓。でも、どの部屋にも窓なんてなかった」

「全ての部屋を見たわけじゃないでしょ。行ってないところもあるんじゃない。特に」

最後まで言わずに彼女は天井を見上げた、と思ったが違った。彼女の視線は天井の隣にある窓にそそがれている。

「最上階？ そこに窓があるの？」

「それは自分で確かめてきたらいいんじゃない」

試すような視線がこちらを射ぬく。僕は腕を組み少し考える。おかしなところがいくつかある。

「たとえ窓があるとしてさ。どうしてウォーターはそこから脱出しないのさ」

そもそもそういう話だったはずだ。どうやってこの館から脱出するか。本当に外への窓があるのなら、この問題はほとんど解決したに等しい。

「なんのこと？」

とぼけた表情でほほえむウォーターにいらだちを含んだ声を返す。「何って、本当に窓があるならウォーターがそこから脱出できるじゃないか」

「あら、私は窓があるなんて言った覚えはないわよ」

なに言ってるんだと声を荒らげそうになり、実際彼女の言葉から窓なんて一つもでてないことに気がついた。

「それなら最上階に何があるのさ？」

それに対してウォーターは軽く微笑むだけだった。

「……興味をそそるような事を言っても僕はわからないからね。足が



疲れてるんだ。とてもじゃないけど、最上階まで行く気力はないよ」「そう」

ウォーターは静かにそう言った。

視界の隅でふらふらとクロツクが立ち上がる。ようやく立てるようになったようだ、まだ足元はおぼつかないようで転んでは立ち上がりを繰り返している。ウォーターはその姿を名残惜しそうに見つめていた。

「最近良く思うの」

視線をクロツクに向けたまま大きなため息をついて彼女は話し始めた。

「毛虫は本当に蛾になりたいのかなって。蛾になれば自由に空を飛べる。毛虫は本当に蛾になることを望んだのかしら。頭にあるのは幾ら葉っぱを食べるかという本能だけ。蛾にならなくてもその生活に満足していたんじゃないかしら。今のままでもいいじゃないかって思わなかったのかしら。進化っていうのはそれほど大切なことなのかしら」

彼女の声は話すごとに萎んでいく。

「望まなくても訪れるもの。災害、退化、進化、罰、時間。さあ、私たちはそのうちのどれに当てるはまるのかしらね」

僕たちはお互い微笑み合った。そうすることで彼女が安心するのなら頬の筋肉を上げることは簡単なように思えた。

「私はねロープ。こう見えて不安でたまらないのよ。少しでも、一時間でもこの不安がなくなるなら何だってする。分かるのよ、追い込まれてくのが。誰も助けてくれない。ゆっくりと泥の中に体が飲まれていく不安。それをただ黙って見守ることしかできない焦燥」  
ため息をつくしかなかった。

「分かった。行くよ」お手あげだと僕は両手を上げた。「行けば、ウォーターの不安が少しでも薄れるなら」

「私そんなこと言ったかしら」

言葉とは裏腹にウォーターは試すようにこちらを見つめた。

「いいさ、僕だって気にならないわけじゃない。その代わり条件がある」

「何かしら」

「僕が最上階に行ったらペンに会いに行くってのはどうかな」

ウオーターは少しためらってから表情を歪め苦々しい声を出した。

「考えとく」

「忘れないでね」

それじゃあ最上階に行ったら戻ってくるから。僕はそういつて中庭の休憩所を出た。

「待って」

「どうしたの」

ここに来たときと同じように欄干にもたれ彼女は言った。

「ありがとう……ごめんなさい」

最後の声は聞き取れるか聞き取れないかほどの小さな声だった。僕はそれに軽く手をあげて答えた。

### 青紫の太陽 3

館内に入ってすぐ足元の違和感に気づいた。ねっとりした感触。絨毯から足を上げるとそのまま絨毯の色がこびりついたかのような赤い液体が靴裏に付着していた。クロツクのものだろう。内窓からちらりと中庭を見るとやはりクロツクの姿は見つからなかった。

この館でブロンズが僕らにとって異質な存在なように、ブロンズにとっても僕らはまた異質な存在だろう。

それではクロツクはどうかと言えば、彼は僕らの思考の外にいる。異質といってもブロンズがブロンズである理由は少なからず分かるというのにクロツクだけは全くもって理解出来ない。

体の潰れる痛みがあるだろうに、どうして身を投げることに固執するのか。狂っているといえればそれで終わりだが、それでいて一定の時間を置いて正確に時間を刻んでいるところがまた分からない。

ペンが言うには

正確に時間を刻む壊れた時計こそ意味の分からないものはない。

最上階を目指し階段を登る途中で図書室に寄って行こうかと考えた。ペンに意見を聞いてみたかった。ウォーターが最上階に何を求めているのかを。話したかった僕は図書室の階を無視して階段を上った。

ペンとの会話は簡単に想像できる。彼はきつて手に持ったペンをくるくると回しながら言うのだ。

「ウォーターに最上階へ行くよう言われたんだって。君は本当に人好しだな。やめとけよ。そのうちクロツクと一緒に館まで飛び降りろって言われるぞ」「そうかな」「そうさ、それよりも面白い本を見つけたんだ。君の好きな冒険SF。きつと気に入るぞ」

そうなれば本の誘惑に負けないほど僕の精神は強くない。

最上階は六階。図書室は三階。まだ半分以上も登っていないというのに僕の足は限界に近づいていた。最初に大量の本を持ったま

ま階段を降りて行ったのも応えたが、それよりも日頃の運動不足の方が明確な原因だろう。四階手前で階段に腰をかけた。乱れた息を整えながら、下に降りるとき見かけた青いシャツを着たブロンズのことを思い出した。

またいつの間にか移動したようだ。

この館に僕らの他に全く話すことをしないブロンズという存在がいる。ペンが名付けた。

彼らは館のそこしかにいて銅像のように座ったまま動かない。それでいて少し目を離すとそこから消えてまた別の場所で座り込んでいる。座り込むというのは分かるような気もするが、なぜ頻繁に移動するのかよく分からない。聞いてみたところで応えが帰ってくることがないので、この謎は僕とペンの間でいい暇つぶしとして話題になる。

有力なのは彼らが僕たちの監視員だということだ。実はこの館が僕らを観察するためだけの場所であり、ブロンズ達は僕らを観察するために目を光らせている。目的は分からないし、そもそもどこに報告しているか分からない。

きつとウォーターにはまたSFの読みすぎだと言われるだろう想像である。また暇なときに挑戦するのもいいかもしれない。ブロンズの観察日記。ウォーターの意見も聞きたいな。有意義な自由研究になりそうだ。休憩を終えてそんなことを考えていると登るべき階段がなくなった。

最上階といっても他の階と変わるところはない。赤い絨毯。中庭を見下ろす内窓と廊下を挟んで等間隔で並ぶ幾何学模様の扉。これ以上登る階段がないだけだ。部屋の中はどうだろうとさっそく近くにあって扉に手をかける。

図書室より少し小さいぐらいの部屋にベッドと小さなテーブルが置かれていた。窓はなく少し優雅な牢獄にしか見えない。やはり他の階にある部屋と変わりはない。一応この館には図書室やらラウンジが階ごとにあるがそれも三階の図書室までで他はすべて質素

な部屋で囲まれている。

そんな代わり映えのない部屋を半分ほど探して、もしかしたらウォーターにかつがれたのかもしれないという考えがよぎった。ウォーターならやりかねない。彼女は今ごろ休憩所で笑っているのだろうか。

そう思うと急激に気分が萎えた。唾でも吐き落としてやろうと内窓を近づき、息が止まった。

天井に青紫の色が視界一杯に広がっている。頭では分かっていた。中庭から見れば手でつかめるほどの青紫の太陽も、きつと間近で見れば大きなものなのだ。それでも、実際にその大きさを目の当たりにすると咄嗟に反応ができなかった。

中庭と同じ大きさをしているのだ。

青紫の太陽はその姿を誇示するように堂々とそびえている。禍々しいほどの色彩を放ち触手のような突起物をくねらせている、ように見えた。

まじまじとその太陽を見つめる。

青紫の太陽こそ、この館で一番謎ではないだろうか。今まで気づかなかったことに驚く。今まで近くにありすぎて、馴染みすぎて意識することすらなかった青紫の太陽。

どれだけ世界に太陽の色があろうと青紫という色は絶対に有り得ない。青い薔薇と同じ矛盾。館の天井に描かれている太陽にはいったいどのような意図が隠されているのだろうか。

考えれば考えるほど。見つめれば見つめるほど、僕の視線は青紫の太陽に絡め取られていく。蛇に睨まれているようなひしひしと太陽の視線を感じ、僕もそれに応えるようにじつと太陽を見つめる。

青紫色しかない。太陽という形は段々と現実味はなくなっていき、球体の周りに絡む触手がゆらゆらと動いているように錯覚する。少しずつ青紫の太陽が近づいているようだった。紙に垂らしたインクのように僕の視界の中に染み渡っていく。

僕はそこで青紫の奥にある世界に気づいた。じつと見つめる青紫

の中に洞窟に似た奥行きがある。そこは青紫でありながら色濃く深い闇が広がっている。

耳の奥に違和感があると思えば、それはどこか遠くの方で響く声だと気づいた。それが少しずつ近づいてくる。まだ何をいつているか分からない。

青紫の濃い闇がもそもぞと動いている。魚の卵のようにひしめき合っている何かがゆらゆらと蠢いている。その突起物のひとつひとつに目と口があった。線を細く書いたような目と口が不規則に開いて閉じる。曲がって伸びる。

くぐもった音が次第に鮮明になっていく。遠くではくちやくちやくとささやくような音だったが、次第に多くの人間が話しあうざわつきにも聞こえた。そして次第にその声はカエルが合唱をしているざわつきにしか聞こえなくなつた。

青紫をした洞窟の中を必死で見回す。ふと、洞窟の壁にこびりつく突起物が、こちらを見つめていることに気づいた。すべての突起が怪しく光る二つの目をこちらに向けていた。細かった口が開きけらけらと大きな口を開いて笑っている。上も下も関係なくぞわぞわと突起物は餌を待つ雛のようにこちらを見て騒いでいる。

誘つように僕に向かって喚んでいた。

よつすきあつぶくぶくふと。

まるで歌うように幾重にも重なって聞こえる。はっきりとそう言っているのが分かつた。

よつすきあつぶくぶくふと。

異様にはっきりとその言葉聞こえてくる。他の声は重なり不鮮明であるにもかかわらず、一つの声だけまるですぐ側でささやかれているように聞こえる。

「よつすきあつぶくぶくふと」

それが自分の口から発せられたものだと気づいたとき、喉を引き裂くような声にならない悲鳴がこみ上げてきた。

## 青紫の太陽 4

全身から冷や汗がにじみ出していた。喘ぐような息のまま僕はまだ窓の前に立っていた。窓に映る自分の瞳が惨めになるほど震えていた。

夢を見ていたのだろうか。頭の裏側で繰り返される悪夢のような光景。ようすきあうぶくぶくと。彼らの歌う声が幾度も反芻される。粘つくように彼らの歌が真つ白になった脳から離れない。

濡れた砂袋を交互に引きずるような音。背後の廊下から聞こえてくるそれは、こちらに向かっている。

きつとこれもまた幻聴だと言い聞かせた。それがだんだんと音の大きさが増していく。後ろに伸びる廊下が窓越しに映っていた。その廊下の奥から何かが歩いていた。そのとおりかから影が覗いて僕は咄嗟に目を閉じた。

その間にも何かは足を引きずり湿った音を鳴らして少しずつ近づいてくる。

静まったはずの心臓はまた鼓動を早めていき、両手を窓に置き震えを止めた。足音のようなそれが真後ろにまで来ていた。それは止まることもなく僕の背後を通りすぎていく。その瞬間、生臭い匂いがつんと鼻をついた。

こちらに気づいていないのか興味がないのかそれは通り抜けていく。ゆっくりと息を吐き出しながら気配が消えてくれるのを待っている。それは歌うような声をだした。

「ようすきあうぶくぶくと」  
目を開いた。それは少し先でこちらを見つめていた。本で読んだ宇宙人のようだった。

色素がなく魚のようにぬめりとした肌。驚くほど手足は長く、猫背気味の姿勢でも頭は天井につきそうだった。本の中での宇宙人ならその顔にアーモンドの形をした大きな黒目がついているはずだが、

目の前にいる化物は限りなく人間に近い顔の構造をしていた。ただ眉毛や髪の毛といった毛根が一切なく、全体が弛緩しているにも関わらず皺ひとつないところは人間とはとうてい思えない。もしかしたら熱い蠟を全身にあてて、手足と胴体を縦に伸ばせばこの化物を作ることは可能かもしれない。

じっとしたまま何もしない化物。こちらに敵意はないらしい。ゆっくりと視線を外すとしばらくして化物は歩き始めた。

横目で見てみると化物はすりあしのように歩き、階段がある側のちょうど真正面にあたる扉の前に立った。化物は扉を開けるとかがんでその中に入ってしまった。

あれは何だったのか。ここの建物にきて様々な人間を見てきたが、あんな生き物は見たことがなかった。

踏みつけられた絨毯に足跡がついていた。引きずっていたように思えたが、足は一応浮かしていたらしい。人間と同じ五本指の足跡がくつきりと残っていた。

その足跡を辿って行く着く扉。

その扉には他のどの扉にもある幾何学模様が彫られていなかった。館に共通する扉の幾何学模様はなく、目の前の扉には中心に丸がぽつんと彫られているだけだった。

目の前にある円を見つめて最初は天井に描かれた太陽だろうかと思っただ。それにしてもあの触手のようなものが足りない。じっとその丸を見つめているところに声がかかる。

「見た？」

突然の声に驚き振り返ると、すぐ後ろにクロックが立っていた。

扉の形に気をとられて近づいてくるのに気付かなかっただらいい。

「さっきの見た？」

ぼそぼそと呟くような声でクロックはもう一度繰り返した。

いつもの血が固まりどす黒くなったシャツ。皮膚にへばりつく血はかさぶたのようだった。それも乾燥し剥がれていき、真っ黒になった髪や肌からまだらのように人間らしい部分が覗いていた。



「あの化物のこと？」

それを聞いてクロックは笑みを浮かべ首を縦に振る。前髪が目にかかっており何を考えているのかいまいち分からないが、どこか喜んでいそうな雰囲気があった。

「ヨウスキアウフ」

「なに？」

「そう言っただだろ」歌うようにクロックが言う。「ヨウスキアウフグフグフトって」

ようすきあうふ。

脳内にまたあの言葉が繰り返される。確かに言っていた。あの歌うような声。

「僕がそう名付けたんだ。君たちと同じ。知ってるよ。君たちは僕のことをクロックと呼んでるだよね。ここには時計がないから僕をクロックと呼ぶんでしょ？　ここでは僕が時計なんでしょ？」

クロックは尋ねた。顔を斜めに向け血で固まった前髪がずれる。血走った片目がこちらを覗いていた。引き攣ったように口元を上げて、まるで壊れた人形のような笑い声を漏らす。

「ごめん」

「謝る必要ないよ。僕も君たちの事をそれぞれの愛称で呼んでるんだからおあいこだ」

妙に馴れ馴れしいクロックを見て僕は心底驚いていた。クロックもブロンズと同じだと思っていた。話しかけても返事の帰ってくることはない銅像だと。

僕も今まで何度も話しかけたことはあったがクロックが返事をすることはなかった。血まみれになって倒れているときに口を開いて何か言おうとしたことはあったが、結局は何を言っているか聞き取れない。その時は口の筋肉が痙攣しているのだとうと考えた。それほど彼が話すことは僕にとって有り得ないことだった。

それが急に話してくるものだから僕は戸惑い何を言っているかわからない。

「それはよかった。それで、あの」

「クロツクでいいよ」

「じゃあクロツク一つ聞きたいんだけど君はあれを知ってるの。あの、ヨウスキアウフを」

僕の言葉を聞いてクロツクは今まで以上に口元を吊り上げた。それだけだった。

「ねえ」

問いかけても返事をするのではない。にやにやと笑っているだけ。答えてくれる気はないようだった。

疲れていた。自分の席が恋しかった。早く図書室の椅子に座っていたかったが、目の前のクロツクはどいてくれない。

「何かようがあるの？」

クロツクに問いかけるが返事はない。

「飛び降りるとね」

「え？」

このまま帰ってしまおうとしたとき唐突にクロツクは話し始めた。「飛び降りると死ぬほど痛いんだ。とくに頭から飛び降りた時は最悪だ。痛覚も潰れてるから痛みはまったく感じないけど、回復するうちにじわじわと染み渡ってくるように痛みが込み上げてくる。肺のなかには血が入っていて陸にいながら溺れてしまう」

クロツクは自分の死んでいく様を語っていた。とき歪な笑い声を上げ、思い出すように声を震わせる。

「何で僕が飛び降りるか分かる？」

僕がかぶりを振った。身勝手に話し始めるクロツクに怒りを通り越して呆れていた。

「伝えるためだよ。時間を」

当然だと言うようにクロツクは言う。それにうんとも言わず、僕はじつとクロツクを見つめていた。汚らしい真っ黒な全身。彼から血の匂いがした。先程からじよじよに嫌悪感が込み上げてくる。

「それより、ロープ。君はこの部屋に入るつもりなの」

クロツクの目が隣にある扉に注がれた。手を伸ばし丸に彫られた部分をさすっている。そこでようやく最上階に何をしに来たのか思い出した。

「入ったほうがいいのかな」

クロツクにはなく自分に言い聞かせるように言った。

「それは止めておいたほうがいい」クロツクは扉の前に立ち首を振った。「まだ早い」

「早い？」

「そう、君にはまだ早い」

無理やりどかせることもできただろうが、そうだった気もおこらなかつた。もうクロツクに関わるのすら億劫だった。

「分かつたよ」

僕はそういつてクロツクに背を向けた。じつとクロツクがこっちを見ているのが分かる。

微かにクロツクの声が聞こえた。聞き取れない低い声でぼそぼそと何かを呟いた。

振り返るとクロツクが口元に手をやり笑っていた。こちらがおかしくて仕方ないそう言っているようだった。

## 青紫の太陽5

三階に着いた頃には体から倦怠感が滲みでるようだった。すごく疲れていた。今日だけでいっただい何度階段を往復しただろう。足はだるく、頭の方も靄のかかったように思考がはつきりしない。早く自分の席に深く座り込みたかった。図書室の自分の席に。

図書室の扉をあけ古い紙の匂いが鼻をつく。そこでようやく気分が落ち着いた。肉体も精神もほぐれていくのが分かる。図書室は何も変わっていない。図書室と呼ぶにはいささか小規模すぎる本のたくさん置かれている休憩室。それでもペンと僕が使う分には有り余るほどのスペースがあった。

堅くも温かい木製の椅子の感触に懐かしさを感じながら深く腰掛ける。照明の明かりとテーブルを挟んで向こう側にいるペンは読書に集中しているようでこちらには気づいていないようだった。

「一番上で不思議な生き物を見た」

ようやく視線を上げる。ペンはああ、と唸りにも似た表情の乏しい感嘆の息をついて持っていたペンをくるりと回した。

「見たのかあれを。どうだった？」

「まさに化け物って感じ」

「その通り」こちらの反応がおかしかったのかペンは微笑んだ。「それが正しい答え。あれは、化物だ」

化物を強調する。皮肉のニュアンスを含んだ言葉だった。

「説明はしないよ。あれは化物なんだから。後は自由にしてくれよ。記憶から消えるよう努めるもよし、その生き物と仲良くするといつのも案外楽しいかもしれない」

ペンはそう言うとは話は終わりだと本に視線を戻した。ゆっくりと本が汚れないようにページをめくるペンの神経質な音だけが聞こえる。

いつもと同じ図書室で、いつもと同じ場所で、いつもと同じペン

だというのに僕はこの図書室にどこか違和感があるような気がしてならなかった。

「ウォーターが見て来た方がいいっていったんだ」

ペンに向かって言い訳のように声を出す。視線が上がることはない。

「その方が僕のためになるって。そろそろ知るべきころだって。それが何なのか知らないけど僕の知らないことがあるなら、知りたかったから」

顔は本に向けたまま黒眼だけがこちらに向く。今まで見たことのないペンの鋭い視線に一瞬たじろいだ。すぐにその視線を戻し、ペンは口を開ける。

「好奇心程度の知りたいたいならやめといた方がいい。何にしても深みにはまれば出れなくなる。それが知りたいという欲求ならなおのことだ。終わりがないし、それが本当に求めているものじゃなかったときに後ろを振り返れば何もなし」

話している途中あたりからペンで机を叩いていた。コツコツと図書室にその音が響いていた。それはメトロノームのように一定の音を刻んでいた。

「あの生き物が一体なんなのか僕は知りたい」

「知るべきじゃないし、知りたいと思うものではない」

「どうして」

「不幸せになるからだ」ペンはまた睨みつけるような視線を寄越した。「好奇心は大切だけれど、好奇心はその人の身を破滅させる。」

パンドラの箱の話を知っているだろ。好奇心に負けたパンドラはゼウスからもらった箱を開け、多くの災いを世界にばらまいてしまった」

「その話には最後に希望が残ってたと思うけど」

「分かっているけどね。希望が一番の災いなさ。希望を持っているという事は、決して諦めだれないということなんだよ。希望がある限り人はそれにすがりながら常に辛い現実と向き合わなければな

らない。逃げることもできず、気づいた時には両足を太ももあたりまで突っ込んでるんだ。そうして自力では出られなくなって初めて今まで見ていた光がただの絶望でしかなかったことに気づく。パンドラに残っていた希望こそ最大の災いなんだよ」

ようやく自分が机を叩いていたことに気づいたのか、ペンは不思議そうに自分の持つているペンを眺めた。やがて、その表情が憂鬱なものに変わる。手に持っていたペンを握り込む。

「僕にとってはこのペンがパンドラの箱だった。知らなければもつと違うものが見れたかもしれないのに」

憎々しげにいつてペンは手に持っていたものをテーブルに落とす。予想以上にそれは重い音がした。そのペンはカラコロと音をたて転がり落ちそうなところをすかさず掴まれる。

「だけど今の僕にはこれしか残っていなかった」  
乾いた笑いを見せながらペンはそれをくるくると回した。

「これは鉄製でね、なかなか良い値段がするんだ。死んだ爺さんの形見でもらったんだけど素晴らしいよ。他のペンと違って思いから重点が取りやすい。そして回し易い。最高だろ？」

こちらに微笑みあつける顔はどこか不自然だった。ペンは夢中になってペンを回していた。それしか知らない猿のよう懸命にペンを回していた。やがて回していたペンを止め、その先をコツンとテーブルに当てる。それを見計らって僕は話した。

「希望がどうかというのは別に興味がないよ。僕の聞いたことに答えてくれればそれでいい。あの化け物はいつたいなんなのか知っていたんだ」

「希望の話はちゃんと君の質問と繋がったつもりだったんだけどね。まあ知りたいならウォーターからも聞けるだろうし。本当に聞きたいのなら話すけど」

無言で頷いた。

「そうか、それじゃあ話すしかないな。あの生き物が何なのか、か。逆に聞いてみよう。君はあの生き物が何だと思ってる？」

「僕の考えなら、あれは元々あそこに住んでいた生物。そいつらは引籠もりで普段は最上階から出てこない」

「面白い話だ。けれど残念。不正解だ」

「焦らさないでくれ」

「焦らしてるんじゃない。待ってるんだ。君が正解を言うのを」

お手上げだと言うように僕は両手を上げた。

「それじゃあそろそろ正解を言うよ。けど、最後にもう一回忠告しておくよ。あの化け物はなんなのかという質問はパンドラの箱を開けるのと同義だ。君はこれから微かな希望を背負わないといけない。その勇気が君にあるか？」

大仰に。まるで舞台のように声を高らかと話すペンは自分の影に潜んでいる怯えを表に出さないよう必死になっているようにしか見えなかった。

「教えて欲しい」

ゆっくりと僕は言った。

「何回も君に忠告した。それでも君は言う事を聞いてくれない。いさろープ、君がそんなに聞きたいっていうなら話そう。あれが僕たちのなれの果てだ。進化でもない退化でもない。僕たちはいつかあの化け物へと姿を変える」

「僕たちがあの化物になる？」

そうだとペンは頷いた。冗談を言っているようではなかった。

「膜が体全体を犯すように張り付いたあと、一晩であの体が変わる」  
そんなわけがないと言おうとする僕にペンは人差し指を立てた。

「一度、その光景を見たことがある。壮絶だったよ。骨が鳴る度にくぐもった悲鳴を上げて、痙攣するように痛みを耐えていた。顔は悶絶するように歪んで、どこを見ているのかわからない眼球の中が、だんだんと暗くなっていく」

ペンは目を閉じた。目元に手をやる。頭に浮かんだ映像を振り払っているようだった。

「一度見たら忘れられない。いずれ自分もあの姿になると思うと死

にたくなる」

回そうとしたペンがテーブルの上に転がった。ペンはそれを拾おうとせずじっとペンが落ちていくのを見守っていた。ペンが落ちる。

「僕たちは罰を与えられた」ペンを拾い上げながら「化け物への変化は罰の一つでしかない。本当の罰への過程だ」

「本当の罰って？」

扉という単語にペンは異様なほどの反応を示した。再度回そうとしていたペンを握り締めた。その手がかすかに震えている。

「あの扉には何があるの？」

「言葉にできないよ、あれは」何かをこらえるような声。「君自身の目で確認した方がいい。そこでようやく君は気づくんだ。』ペンは僕のことを切実に考えてくれていたんだ。ああ、僕はなんて罪作りな子なんだろう』ってね」

罪作り。

罪作りな子。

「……どうかしたのかロープ。顔が真っ青だ」

ペンの言葉に返事をせず僕はきよきよと震える視線を辺りに向けた。震える体を止めようと必死で体を抑えるが震えが止まらない。

「どうしたんだよロープ」

ペンの言葉は頭に入ってこなかった。頭に蠢くひとつの言葉が脳内を引きずり回る。

罪作りな子。

映像が流れこんでくるようだった。その波を必死で抑える。椅子を倒しながら立ち上がる。動いていなければこの衝動は抑えきれない。ふらつき本棚にもとれながら震える足で図書室の扉へ向かう。

「どこに行くんだ」

背中に声がかかる。扉に体重をかけながら、幾何学模様をじっと見つめる。深呼吸をするようにつとめた。



「どこでもいいだろ」僕は額に浮かぶ冷や汗をぬぐいながら、苛立ちを隠さずに声をだした。「中庭へ行こうが最上階へ行こうが僕の自由だ」

「最上階に行くべきじゃない」

「言ったよね。希望が最大の災いだって」

「言ったよ」

「じゃあ」唾を飲み込む。「絶望はどれほどの災いなんだ？ 希望をもって辛い現実にするのと絶望で足をすくわれて自分の殻にこもりながら絶望をごまかして怯えるのとはどっちが不幸せなんだ？」  
ペンは黙った。

自分の荒い呼吸の音しか聞こえない。僕は混乱している頭の中でずっと三角形が折り重なった扉の様子はじつと見つめている。そうすると微かにそれが動いているように見えた。目の錯覚だと分かっていたても、その模様自体が意思を持って動いているようだった。少しだけ思考がそれで息が楽になっていく。

「笑うなら笑えばいいさ」

怒鳴るような大きな声だった。

「僕は前から何も変わっていない。これが僕だ。辛い事からは逃げる。それが僕だ。元からこうだったんだ」

僕は何も言わずに廊下に出た。腕の震えをどうにかしたかった。罪作りな子。

先程から一向に離れる気配がない言葉。

「……ごめんなさい。ごめんなさい」

呪文のようになんども呟く。背後からペンがまだ怒鳴っている声を聞いた。それを無視して僕は図書室から出た。

「ごめんなさい。ごめんなさい」

罪作りな子。

その言葉が頭から離れることはなかった。その冷たい言葉が残酷なほど鮮やかな色を持って耳に流れる。

「ごめんなさい。ごめんなさい」

目からは涙が溢れていた。廊下を数歩歩いてうずくまり僕は頭を抱え込んだ。

「ごめんなさい……母さん」

## 青紫の太陽5（後書き）

書きあがったものに手を加えるつもりはなかったんですが、自分の未熟さに我慢できずに細々と修正しました。これからは修正したものを上げることにします。

## 青紫の太陽 6

クロツクのつぶれる音が耳についた。あれから、ペンと口論をしてからずっと最上階でうずくまっている。何度クロツクの潰れる音を聞いただろうか。それすら分からずに僕は考えるのをやめて座っている。

震えは今でも思い出したように現れて、あの言葉は波のように僕をどん底に突き落とす。その度に体を抱きしめて耐えるしかなかった。まるで病人だと自分でも思う。それでも立ち上がる気はおこらなかった。

気分がいいとき青紫の太陽を見つめた。それ以外にもヨウスキアウフがあの手を抜けて入って行くのも、クロツクが飛び降りる所も何度も見た。最近のクロツクは僕が見ているのが嬉しいのこちらに手を振りながら落ちていく。

「やあロープ」

そして数時間ほどしてから階段を登ってきて親しげに話しかけてくる。血で濡れた体から話すたびに血がこぼれる。絨毯は赤い。

「今日のは一段と酷かったよ。膝から垂直に落ちちゃってね。足の骨がそのまま胴体に入り込んだ。痛かったな。内臓がぐちゃぐちゃになって腹からはちきれちゃったし」

笑いながら彼はいつも自分の落ちたことを報告する。気持ちのいいものではなかったのだから無視していた。それでも彼は自分の話を終わると満足したようにどこかへ消えていく。

だが今日は違った。にやにやとこちらをのぞき込んでくる。

「今日は戻る途中に面白いものを見つけたんだ。聞きたい？」

とくに反応を示さない僕に機嫌を悪くすることもなく、クロツクは嬉しそう廊下の奥の方を指差す。

「向こうの端にさヨウスキアウフになる直前のブロンズがいるんだ。ヨウスキアウフになる直前の奴は見たことないだろ。あいつら面白

いんだ」

乾いていない前髪から一滴の血が落ちた。吸い込むように絨毯は血をすっていく。

それからクロックが何か言っていたが、いつの間にかクロックは目の前から消えていた。時間の感覚も最近はよくわからない。クロックが去ってからどれくらいたったのか。それを考えながらクロックの言葉が浮かんでくる。

立ち上がった。ヨウスキアウフになる寸前の子供というのが気になった。

青いシャツを着た金髪の子だった。頭を抱え込んだブロンズの格好で細かく震えていた。彼の姿には見覚えがあった。前にウォータ―に本を届けたとき階段で見かけた青子だった。前に会った時と同様に彼は廊下に座り込み、腕の中に顔をうずめていた。近づくと同時に生臭い匂いが鼻をつく。

ヨウスキアウフの匂い。

肌のぬめりけ以外はどこも変わっていないように思えた。少年は僕が目の前に歩み寄っても何も反応することはない。しばらく迷ってから声をかけた。

「やあ」

返事はない。無言のまま少年の隣に腰をおろした。ブロンズが元々返事をするという期待はしていなかった。それならば彼が怪物になるのをじっくり観察しようと思った。彼の隣は想像していたより生臭かった。

強引に伸ばされた細くぬめりけのある腕。毛という毛は全て抜け、肌も色素が抜けてしまったように真っ白くなる。はちきれんばかりに太ももの筋肉が発達しカエルのようにしゃがみ込む。

隣にいるブロンズはともそうなるようには見えない。手足を引っ張られる以外にどうやったらヨウスキアウフのように細長くなれるのか想像もつかなかった。

「変態って知ってる？」

ウオーターの話を思い出した。

幼虫がサナギになり、その中で一度とけて蛾になる。それなら納得がいく。

サナギの中でぐちゃぐちゃになってヨウスキアウフに姿を変えることを想像しながら、どうしてこれほど現実味がないのか僕には分からない。ペンから聞いた時もそうだった。彼はなぜそんなことであれほど動揺しているのか不思議でならなかった。たかが化け物になる程度ではないか。

それは以前の経験よりも恐ろしいことなのか？

ブロンズの少年を観察してどれほどたただらうか。少年が腕の中からのっそりと顔をあげた。その姿は水に潜った魚が呼吸をするようだった。

太陽なんてものは見たこともないというような陰気な表情だった。顔中の筋肉はだらしなく弛緩し、しょぼしょぼとした目がこちらを覗いている。不思議そうにするでもなく何の表情を見せることもない。中途半端に開いた口から言葉が漏れることもなかった。

それを熱心に見つめながら、次のアクションを待った。

ようやくヨウスキアウフに変化するのだろうか。興奮を隠し切れずゆっくりと息を履きながらブロンズの少年を見つめていたが彼は動くこともなくゆっくりと視線の方向を変える。その先には青紫の太陽があった。

「あの太陽はなんなんだろうね」

こちらの声に今気づいたというよう彼は目を見開かせこちらに顔を戻す。そのアクションもまた非常に胡乱で、彼は不思議そうにこちらを見つめる。水色をした綺麗な眼だった。泣きつかれた子供のようには無垢でありながら濁っているようだった。

少年はまたゆっくりと口を開く。

「ようすきあつぶくぶくふと」

歌うようにその声が響く。一呼吸置いてブロンズは異様にぎよるついた目をさらに見開き、見る見るうちに顔が青ざめていった。表

情が驚愕に変わるスローモーションを見ているようだった。それが急に速度を増し、弛緩していた筋肉はわなわなと震え口をさらに大きく開いた。

「ようすきあうぶぐぶぐふと！」

少年は突然と立ち上がる。自分で言った言葉が信じられないというように口元に手をやった。空気を求めるように口をパクパクと動かす魚に似ていた。震える手で頭に手をやり掻きむしる。ぱらぱらと絨毯に毛が落ちた。少年は目を絨毯に落とし、固まったかと思うと無言のまま口を大きく開き駆けていった。

少年はいったい何を恐れているのか。彼が消えた廊下の向こうを見つめながら考える。

いつか訪れてくる死も、まもなくやってくるヨウスキアウフへの変化も変わらない。最後には死体か化物かの違いはない。それならば僕たちこそ怖がる必要がない種類も珍しいはずなのに。

## 青紫の太陽 7

「ここは牢獄。自ら命を絶つた愚かな子供たちを閉じ込めて自分でかした罪。そして死を決意した私たちにまた生を与える皮肉のきいた罰。最後にはあの化物に姿を変えてヨウスキアウフと泣き続ける。それが私たちの償ない」

本を敷いた床に寝そべってウォーターは話している。胸の上で手を組み、目をつぶったまま話すその姿は天に召される無垢なる少女のようだった。

ウォーターのいる中庭にやってきたのはずいぶん久しぶりだったにも関わらず彼女の態度はいつもと変わらない。それが少し嬉しかった。そして本を読むのをやめている彼女を見て、時間は確実に経過していることを実感する。

「あの化物の変化にサナギはいらない。なぜならこの館こそが私たちのサナギだから。本来なら輝かしい蝶になれるはずだった私たちは自らその権利を放棄したという罰でこの館に放りこまれた。館という形のサナギ。醜い形をして救いを求めるよう光を探す蛾になるの。ヨウスキアウフと鳴く蛾に」

「君はまだここから脱出しようと考えているの？」

「脱出？」

「ウォーターが言ったんだ。僕たちがブロンズと違うのはここから脱出するためだからだ。選ばれた子供だからだ」

眠っていた少女の目が静かに開いた。焦点のあっていない目は天井の向こうにある青紫の太陽を見つめている。

「無理よ。だってここにはクロックがいるもの」

「……クロックがいる？」

そう、と彼女は力なく答える。

「クロックがいる限り私たちが救われることはない。クロックがいなかったとしてもどうなるかは知らないけど」



疲れたような笑み。目元がかすかに潤んでいる。それを拭う指先はその目以上にぬめっていた。

「ロープ」ようやくこちらに顔が向く。「私ね凄く気分がいいの。とてもよ。今までどうしてこの気持を知らなかったと思うほど。なんで私はわざわざ苦しい道を歩んでいたのかしらね。本当に馬鹿みたい。あの時と一緒に。周りの言葉を振り切って苦しいところへ飛び込んだ。私もいつも同じ」

そう言っただけで彼女は床に散らばっていた紙片をつかみ自分の上に放り投げる。白い紙片が落ちていく姿は、まるで白い葉っぱが静かに落ちていくようだった。

あれほど夢中になっていた本の紙片。周りの本は破られ、休憩室の外にも本が散らかってる。まるで台風が通り過ぎたあとだ。

「もしよかつたら本を取ってこようか。最近来なかったから読む本がたまってるだろ」

「もう、いいの」眠たそうな声だった。「それよりも、ねえ、怒ってる?」

「何のこと」

「この館のことよ。見たんでしょ」  
分かるでしょ、と問いかけている。

「私、嫌な女でしょ。知らなくてもいいのに、知らないまま過ごせただけなのに……ごめんね」

「気にしてないよ。驚いたけど怒る必要もない。いつかは知ることだ」

「ロープは怖くないの?」  
「怖いよ」

嘘をついた。そういった方が彼女も落ち着くと思ったから。

それなのに予想とは反対に勢い良く立ち上がったウォーターの顔は赤く染めていた。歯がゆそうに唇をかみしめ睨むような視線をこちらに投げかけている。何か言おうと口を開いたが、声が出ることはなくすぐさま視線を下ろした。崩れ落ちるようにベンチの上に腰

掛ける。

「あなたが、羨ましいわロープ。必死で抗おうとしているわたしが馬鹿に見える」

「僕も怖いよ」

「いいえ嘘よ。あなたは何も感じてないの。顔を見れば分かるわ」  
「僕がどんな顔をしてるって言うんだよ」

その問いに彼女はしばらく思索しているようだった。そしておもむろにベンチから身を乗り出し天井に顔を向ける。

「青紫の太陽」

彼女は言った。

「わたし達が怖がっているのを上からずっと見つめてる。僕には関係ないけど君たちは見て飽きないよ。そんな顔で笑ってる。嫌な顔。うんざりするわ」

天井から戻ってきた顔がこちらを向く。嫌悪を笑顔で隠したような酷い顔だった。それが自分でも分かっていいのか彼女は欄干にもたれかかり自分の顔を腕の中に隠してしまう。これ以上あなたと話すことはないから。無言でそう言っているようだった。

館に戻った僕は全ての部屋を見て回った。図書室と最上階以外の部屋を探しても目当てのものは見つからなかった。

最上階に戻って僕はいつもの場所に座り込む。顔を上げては青紫の太陽が見える廊下の隅。いつもと変わらない青紫の太陽を見つめながら、ウォーターの言葉を思い出す。

「……青紫の太陽」

分からなかった。自分がいったいどんな顔をしているのか、なぜ彼女はあれほどまでに恐れているのか。結局はブロンズと一緒にではないか。恐れ嘆きゆっくりと順番を待っただけのブロンズと。

「ようやく分かった？」

クロツクが隣に立っていた。声がするまで気付かなかった。

「何が」

「君と彼らは違っただけ」

「そんなの最初から分かってた」

「僕より彼らの方がずっと大人だ。そう思ってたんでしょ」

わざわざ僕の真似をしておどけているクロックに腹がたった。反論できない自分にも同じように腹がたった。

「でも違う。彼らは僕らより子供だよ」にやにやと笑いながらクロックは言う。「君は彼らと違って何も怖いなんて思っていないだろ。でも他の人は恐れている。それが理解できなくて君はいらいらしてるんでだろ？」

「知らないよ」

「分かりやすいね。僕と同じ考えだもん」

「僕は君みたいに狂ってない」

クロックが首をかしげる。

「僕が狂ってる？ どうして僕が狂ってるって思うんだい？」

「自覚がないんじゃないよ。普通の人は毎日飛び降りたりなんかしない」

「ああ、そのことか」にこやかに笑った後にいつもの不気味な笑みに戻る。「ロープにもすぐに分かるよ。これは狂ってるんじゃない。皆のためにやってるってことだから」

顔を上げるとクロックの表情が嬉しそうにゆがんでいた。これほど嬉しそうにしているクロックを僕は見たことがない。

ウォーターの言葉を思い出す。「クロックがいるから」彼女はそんなことを言っていないかったか。目の前にいる狂って真つ赤な少年が何の脅威になるといつのか。

「僕はいつらが嫌いだ」

唐突にクロックは言う。先程の笑みを変えないまま、なんとも嬉しそうに言う。

「彼らの嫌なことをしたくてたまらない。だからこそ僕は時計になった」

青紫の太陽を大きく見開いた目で見つめながら。クロックの言葉に僕は何も言い返せなかった。

「どうしたのさロープ。何でそんなに驚いた顔をしてるんだ。いつものブロンズに向けるあの顔はどうした。さつきウオーターに見せた顔はどうした。君も実は分かっているだろ。僕があいつらを憎んでいるように君も本当は彼らが憎くてしょうがないんだろ。僕たちの苦悩に比べればあいつらの死んだ理由なんて小さなものだ。それでいて怖がっている奴らを見て苛立って仕方ない。そうだろ？」

クロックの血走った目からは言葉通りの憎悪が浮かんでいるように思えた。

「僕たちは一緒なんだよ。一番愛して欲しかった人に愛されなかった。その人だけでよかったのに」

試すような笑みでこちらを見下ろしたとき、僕はすでに波に吞まれている。押し寄せる焦燥にどうすることもできず、頭を掻きむしりたい衝動を押さえて必死で頭を抑えつけた。

「ほら、僕たちはいつしょ」

いつしょ、と一文字ずつ発音したクロックの声はすぐ耳元から聞こえた。クロックが話すとその生暖かい息が耳に吹きかかる。

「そうだ。君に伝えたい事があったんだ」思い出したというようにクロックはわざとらしく手を打った。「ペンはそろそろ危ないよ。もうすぐヨウスキアウフになっちゃう」

嘘のように波が消えた。手の震えはなくなり、心はいつも以上に穏やかだ。クロックは血で固まった指を数え始めている。

「ちゃんと数えてたんだ。ペンはここに来てもうすぐ二十七日。体から生臭い匂いがしてきて、少しずつ肌がぬるりとしてくる時期だね」

にたりと歯を見せてこちらを見つめる。どうすると聞いているようだった。

僕は立ち上がった。クロックを無視して階段へ向かった。そこに歌うような声がかかる。

「たまにはさ、自分を信じてあげてもいいんじゃないかな。たった一人の自分なんだから」

その声に立ち止まり僕はクロックに言う。  
「この館に鏡ってある」

## 青紫の太陽 8

彼の様子はいつもと変わらないようだった。伸びきった背筋も思いついたように回転するペンも最初に会った頃から何一つ変わっていない。それなのにどんよりとした雰囲気図書室の中にもつていた。紙の乾燥した匂いはなくなっており、生臭い匂いがあたりに充満している。

「なあロープ。僕たちの罰はあまりにも理不尽じゃないか」

いつもの調子で、読書に疲れなぞかけ遊びでもしようという調子で前の席に腰掛けた僕に声をかけた。

「だってそうだろ」こちらの答えを聞かないままペンは話します。

「僕は一生懸命やってきた。僕なりにね。それでも周りの飄々としている同級生よりは格段に努力をしているつもりだったんだ。これしかなかったからね。いや、これしか知らなかった、か」

手元のペンを回し始める。それは液体をねっとりとした液体をあたりに撒き散らす。目の前にもそれが付着する。恐ろしいほど透明なはずなのに、どこか濁っているように思えた。

「その時は気付かなかった。僕には多大な才能があると、そう信じてた。それなのに。気づいた頃にはこれしかなかった。だからこそ無我夢中ってやつだよ。ペンしか知らない僕のこととはこれしかなかった」

本のページに流れるような速さで文字を刻んでいく。湿気を含んだページに水彩画のような黒い文字が何かの模様のように書かれていく。

「いくら学んでも終わることはない。これで書いた文字は残っているのに、頭の中にはその一欠片ぐらいしか残っていない。他の人はペンでノートに写さなくても、そのまま脳味噌に書きこんでいく。僕にはそれができなかった。ただ猿のように何度もノートに写すしかなかった」

ノートに書かれた文字の法則性がだんだんとなくなっていく。やがてそれは乱れた線に変わっていく。ぐるぐると白いページがうずまきで満ちていく。

「気づく前から分かっていたさ。僕は持つものを間違えたのさ。これが違うものだったら、また違う結果になったのに。持つものを間違えた。それなのに、僕はまだこれを持ってる！」

うずまきの頂点にペン先を突き刺してペンは怒鳴った。息を荒くし口元が痙攣していた。ペンを持つ手は震え、うずまきの頂点からだんだんと黒い染みが広がっていく。

「僕が悪いのか？ 僕は間違いを認めた。それなのに何でまたこんな不幸を背負わないといけないんだ。何でまたこのペンを持たなきゃいけないんだ！」

怒りをぶつけるように立ち上がったペンはテーブルに置かれていた本を床に叩きつける。それでも握られたペンが手を離れることはない。

床には同じように大量の本が転がっている。あれほど閑静だった図書室はどこかざわついているようだった。

呼吸が落ち着いたペンはゆっくりといつもの席に腰掛ける。テーブルの上で肘をたて両手で頭を抱え込む。その腕は電球色の明かりをうけてのっぺりとした光沢を放っていた。

「なあ、ロープ。僕が死んだ時のことを話したことはあったか」  
かぶりをふる。

「それなら聞いてくれないかロープ。僕が死んだ時を。」  
指の間から見えるペンの目は血走っている。

「いつものように机に向かっていたんだ。他の人に遅れを取らないように努力していた。同じことを何度も何度もノートに書き写していた。確か数式だったよ。長つたらしい式で出てくる答えは異様なほど質素なものだったのを覚えてる。何度も書いているからね、その数式は簡単に書けた。それこそ言葉をしゃべるように。それなのに、その手が止まった。本当に一瞬の事だった。次に出る数字が思

い浮かばなかつたんだ。たったそれだけのことなのに、書かれていく数式がだんだんとミミズがのたまうような文字になっていく。その長つたらしい数式の答えはうずまきになったよ」

聞いたことのない引き攣った笑みが指の間から聞こえてきた。

「答えを書ききった僕は手に持っていたペンを握りしめて、それを耳の穴に当てた。場所を確認してから、握りしめたペんに勢いをつけて耳の中に挿し込んだ。凄まじいね。痛みがだよ。べとべととする液体が耳から溢れでてきてね。僕は唇をかみしめながら泣いたよ。大変だったね。鼻水と涙でノートは汚れて、耳元から出る液体をなんとか拭いたかったけど、少しでも刺さったペんに触れると声にならない悲鳴をあげるはめになる」

その時のことを思い出すようにペンは両手を広げとろんとした目つきで天井を見つめていた。その表情は恍惚としている。

「分かるかいロープ。その痛みで僕は救われたんだ。視界の中で光った虫みたいなのが飛び回っていた。何がおかしいのか、僕は笑えなくてね。笑い声を出す度に痛みで変な声が出た。それで僕はようやく思いついたんだ。きちんと死ねる方法が。転がっていた椅子を立てて、そこからさらに机の上に立った。僕は最後に耳に刺さったペンの位置を確認した。これで失敗したら嫌だからね。確実にペーンが垂直になって地面に激突しなければいけない」

おもむろに、ペンは立ち上がると椅子に登った。天井からぶら下がっている電球を見つめている。右手にはペーンが握られていた。

「僕はテーブルから飛び降りた。頭を下にしたかったから飛び降りるとつていうよりは、倒れこむ形に近かったかな。視界が斜めになっていく。走馬灯なんてものはなかった。ただ時間は緩やかに僕が死ぬのを待っている。ペーンが脳に突き刺さる瞬間。分かるんだ。ペーンの先端がごりごりって骨の間を通過して、柔らかい脳みそをえぐっていくのが」

ペーンは疲れたように座り込んだ。両腕をだらりと下げてペーンをテーブルの上に転がす。ペーンはテーブルの上を転がり僕の目の前で止



まった。

「今思えば僕の見ていた夢だったんじゃないかって思う。本当にそれを実感していたなら今ごろ僕は痛みによって壊れていたと思うんだ。ブロンズみたいに一日中頭を抑えて震えていたと思う。けど、あの時の感触が残ってるんだよ」

「転がり止まったペンをじっと見つめている。」

「ペンがめり込んでいく瞬間が、柔らかい脳みそをペン先がえぐっていく瞬間が」

「血走った瞳が細かく震えていた。」

「なぜなんだろう。あの時は別に何とも思っていなかった。それなのに、今は怖いんだ。死ぬのが、怖い……なあロープ、お前は何で死のうと思っただんだ」

黙っている僕を睨みつけて、ペンはテーブルから身を乗り出し上半身をこちらに近づけた。電球の明かりで影ができペンの顔は異様なほど暗かった。そのなかでぎらついた両目が、じっとこちらを見つめている。

「なんでそんな顔ができる」

低い声だった。心の叫びを必死で押さえつけているような声だった。

「本当は怖いんだろ？ 怖くて仕方ないんだろ？ お前もウォータ―や僕と一緒にだ。それが来るまで耐えられる。それでも実際に近づいてくると、眼に見える形で犯されてくると怖くて仕方なくなる。そうだ。お前もそうに決まってる」

「怖くないよ」

目をそらすことなく僕はペンの視線を受け止めた。

「死ぬのは怖くない。怖くなんてない」

「嘘をつけ！」

怒鳴りつけるペンの胸元を掴みテーブルから引きずり下ろした。地面に叩きつけ、馬乗りになる。ペンは何が起こったか分からないようにで啞然とした表情で僕を見ていた。先程の狂ったような表情が

戸惑いに溢れている。

「ペンには分らないよ。僕の気持ちだ。僕からしたらペンの話はただの甘えだよ。死ぬのが怖い？ それなら最初からここに来る必要はなかった」

暴力に怯えきったペンから目を離さないまま手探りでテーブルの上にまさぐる。冷たい鉄の触感が指先に触れる。僕はそれを掴み上げペンに見せた。

握り締めるのを見せ僕はそのペンを自分の頭の横で振りかぶった。ペンが声にならない悲鳴をあげる。それを無視して渾身の力を込めてペン先を自分の耳の中に挿し込んだ。

歯を食いしばり声にならない悲鳴を飲み込み、震える手でペンを引き抜いた。垂れてくる温かい液体をぬぐい取りペンを床に叩きつけた。

「こんなものだよ。もつと痛いことを僕は知ってる。体の痛みなんていくらでも耐えられる」

耳元から垂れる液体を抑えながら、唾を撒き散らし喚くペンを殴りつける。

静かになった。僕はそつとペンの耳元に口を近づけた。

「これからの苦しみはそんなものじゃないんだ。痛み以上の苦しみを受けてあの化物になる。それが僕らの罰だ。決して救われるものじゃない。今までの行いを懺悔するための罰だ」

顔を上げるとペンの顔は放心したように半端に口をひらけていた。目の焦点はどこにもあっておらず、こちらの声が聞こえていたのか何の反応も示さない。

僕はふらつきながら立ち上がる。図書室の扉を開けるときに後ろを振り向いた。何も変わらずペンが倒れている。先程と何も変わっていないと思ったが、いつの間にかその手の中には鉄のペンが握られていた。

## 青紫の太陽 9

鼓動が鳴るたびに耳の奥が焼けるように痛んだ。その痛みを耐えるとさらに鼓動の激しさが増しそれに比例して痛みの大きさも増していく。脳の奥を虫が這いずり回るような痛みで叫びたくなるのをこらえながら階段を登っていく。

痛みを意識が朦朧としながらなぜ階段を上がっているのか。こんな苦しい思いをしていったいどこに向かっているのか。答えはあの扉の前だった。

丸い模様の彫られた扉。もたれかかり頭をつけた。木製の扉はひんやりとしていて痛みが引いていくようだった。

かすれた笑い声が自分の口からこぼれる。いったい何の笑みなのか。自問したところで笑みが消えることはない。笑うたびに痛むのに笑いが収まることはなかった。

「分かったでしょ？」

クロツクがいた。廊下を挟んだ向こうの壁にもたれている。血で重たい前髪で目許は隠れていたが、こつちを見つめていることがはっきりと分かる。

「僕たちは現世に生まれてきたことがすでに罪だった。祝福されるはずの言葉はねとりとまとわりつく呪いの言葉に溢れていた。愛情の代わりに憎しみを叩き込まれる。他の子供が満たされていくのを見ながら、空っぽの内側が壊われていくのを日々実感する。比較対象がないばかりに苦しいも楽しいも分からず、逃げ道すらなかった。自分が辛いということさえ分かっていなというのに焦燥と不安で毎日泣きそうになりながら暮らしていた」

まるで役者のようにクロツクは言葉を並べる。何の感情も込めることもなく声を落とすこともなく淡々と話しつづける。

「そして成長することで理解する」

自分が誰からも愛されていないということ。

「自分が一番不幸なんていう妄想は僕だって信じてないよ。だけどさ、一緒なんだよ。アイツらと僕らは一緒なんだよ。あんな甘ったれた顔したガキ共と、甘やかされて育ち少しつまずいただけで死を選んだアイツらと僕らは一緒の扱いをうけてる」

アイツらただの甘えなのに。

「奴らと僕らは一緒のカゴに入れられた」  
前髪の間からクロツクの瞳が覗いていた。血走った赤い筋がいくつも伸びている。

アイツらに不幸を。

その目はそう語っていた。

クロツクの燃えるように充血した目の真ん中で翳っている黒目。そこに自分の顔が映っていた。痛みを引き攣り、それでいて僕の瞳はクロツクと同じように見開き、語っている。

アイツらに不幸を。

「僕はクロツク」高らかにクロツクは声を荒げる。「アイツらに時間を教えるクロツク。アイツらに化物までのカウントダウンをしてやる時計」

クロツクは息を荒くして言い終え口元を袖元で拭った。赤い血がねっとり口元に付着する。さらに何度か口元を拭い顔半分を真っ赤に染めながら、クロツクは僕を扉の前からどくように手で示した。「君もそろそろこの中を見る頃だ。知る必要がある。本当にアイツらが憎いなら君も見ておく必要がある」

クロツクが扉を開けた。夜風のように涼しい風が体に触れる。中庭のものとは違う。それは外の風だった。そして風と一緒にあの輪唱が耳の中に流れてくる。

ようすきあうぶくぶくふと。

「さあ、入りなよ」

その部屋は暗かった。他の部屋とは違い電気はついておらず家具が何もない。ただ、向かいの壁に窓があった。白いレースのカーテンがなびいている窓。その向こうもまた暗かった。夜の空。

窓に近づくとように促さる。一步近づくとびに輪唱の聲が大きくなる。ようすきあつふと鳴く声は混じりあい蛙の鳴き声と変わらない。月が綺麗だった。

館の中では決して見ることでできなかった地平線まで広がる広い空に真つ白な満月が浮かんでいる。

ようすきあつふくふくふと。

久しぶりの空に気を取られ下の光景に気づくのが遅れた。それを視界に入った瞬間、痛みを忘れ嫌な汗が全身から溢れてきた。

満月の浮かぶ空の下にあったものは地平線まで続く水面だった。地上はどこにもない。見渡すかぎり水面が広がり、そこかしこでヨウスキアウフがたむろしている。全員が全員浅い池のなかで、突き出た岩の上で一心に月を見上げヨウスキアウフと泣いている。

月に向かって鳴き続けている。

ようすきあつふくふくふと。

窓から身を乗り出し死角になっていた部分を覗いても変わったところはない。水面しかない。終わることなく永遠と繋がっているように思えた。

終わりのない水面でヨウスキアウフが休むことなく泣き続けていた。

「この声はね僕たちの罪を並べてるんだ」クロックの聲が部屋の中に響いた。「どこの言葉か知らないけど。それでヨウスキアウフっていうのは自分の罪を認め悔い改める。そんな意味なんだと思う」

「終わりはないの？」

その声は微かに震えていた。自分でも悲しくなるほど震えていた。「分かるよ。終わるのは怖くない。むしろ終わらないことこそ僕らの不幸だ。けど安心して、大丈夫だよ」

ほら、と真つ赤な指先を窓の向こうに突き出した。遠くで波を打つ音が響いた。そいつは水面から現れた。青紫の色をした触手だった。この館と同じほどの高さがあるその触手は近くで鳴いていたヨウスキアウフを軽々と掴みあげ、水面の奥へとひきずりこんだ。

「終わりが無いわけじゃない。それがどれほどの期間になるかは分からないけど、いつかはあやまって迎えがくる。水面の向こうがどうなってるかは分からない。また生まれ変わるのかもしれないし、罪を償って本当に消滅できるのかもしれない」

どちらにしても、とクロツクは続ける。

「僕らはここで罪を償い続けるしかないのさ。いつ終わるか分からない歌を歌い続け、果てしない水面をさまよいつける。数年、数十年、数百年、あの触手に引きずり込まれるのをずっと待ち続ける。君たちの言う青紫の太陽を待ち続ける。」

笑いがこみ上げてきた。クロツクがいるのも忘れて腹を抱えて笑った。

皮肉だ。生きること恐怖して死んだ僕たちは、さらに生きること恐怖させられる。それも今まで経験してきた年月よりも、想像すらできない長いあいだ。ずっと。生き続ける。

背後から笑い声が聞こえてきた。扉の向こう。中庭の天井から青紫の太陽の笑いが僕の耳にはっきりと届いた。

青紫の太陽9（後書き）

次回で終わります。

## 青紫の太陽 10 終

図書室には誰もいない。僕以外だれもいない。

中庭には誰もいない。僕以外だれもいない。

最上階には誰もいない。僕以外だれもいない。

ブロンズはいる。増え続けている。今日もまたどこかにいる。

館には僕がいる。彼らがヨウスキアウフになりあの扉に消えるのを見送っている。

今まで怯えていたのが嘘のようにおとなしく扉の中に入っていく彼ら。ペンやウオーター。ヨウスキアウフになるころには感情を失ったように静かだった。静かで、それでいて泣いてるように「ようすきあうふ」と鳴き続けていた。きつと今ではあの水面で歌を歌っているのだろう。ペンとウオーターが隣同士で歌っている姿を想像して少しおかしくなった。

日課にしていること以外は図書室と中庭を交互に過ごしていた。彼らが散乱させた本を片付けてもどす。本が散らばっていると落ちて着かなかったから。一人で行うには骨の折れる作業だが、おかげで面白いものを見つけることができた。

休憩所で本を片付け休んでいる時あの本が目に入った。青い蝶の描かれた本。懐かしく思いそれを手にとりばらばらとページをめくっていると一枚の紙切れが挟まれている事に気がついた。

ノートほどの紙にびっしりと文字が書かれていた。箇所ごとで筆跡が変わっている。僕はそれを必死で睨みつけたがすぐに諦めた。専門用語ばかりで何一つ分からない

ただ何について書かれているのかはノートの上の一番の上に書かれた神経質そうな文字で分かった。

「化物にならないために」

驚くほど安易なタイトルに頭の固さがうかがえる。勤勉なウオーターのことだ。結構いい線までいったのではなからうか。そんなこ



とを考えながら目を通していると一番下に二重線の引かれた文章が目についた。

「この館には人の形をした悪魔がいる。そいつには絶対見られないこと」

危うく吹き出しそうになった。悪魔とはまた分かりやすい言葉である。頭のいい人というのは洒落のセンスがなくていけない。誰もかれも目の前しか見えず、それが暗くなれば横を見ればいいものを固い頭でずっと前だけを見続ける。

「悪魔か」

そう呟いた自分の口元がにやけるのが分かる。僕は紙片を丹念に破る。砂のように細かい文字だ。これだけで何時間もかけられて書かれたものだというのが分かる。それがわずか数回手を動かすだけでただの可燃物に成り下がる。

それでも僕は彼らに賞賛の言葉を捧げる。よくぞ、ここまで頑張りましたと。

「惜しかったね。もう少しだったのに」

こらえきれなくなり笑い出しながら、細かくなった紙片を中庭にばらまいた。雑草の上に落ちていく。紙片を眺めてから、僕はその紙片を踏みつつ館に戻り階段を登っていく。

日課の時間だ。時計なんてものはこの館にはない。それでも今がその時間だと分かる。体の奥で今だよと誰かが囁いてくれる。

最上階の絨毯はいつもどおり赤かった。すぐ目の前にある内窓を開けて中庭を見下ろした。白い煉瓦がよく見えた。白い紙片はこの高さから確認することはできない。

天井にある青紫の太陽を見つめた。青紫の太陽の正体を知ってからも僕はこの天井に描かれた絵を青紫の太陽と呼んだ。

時間が来て僕は中庭から飛び降りる。一瞬の浮遊感の後、あれほど嫌悪していたその音を間近で聞くことになる。肉が地面に叩きつけられる音が体中から吹きだすようだった。

笑いたくても指先一つ動かない。ところどころは感覚すら戻って

いない。今はまだ痛覚が回復してないからいいものの、しばらくすると体中がねじ切れるような痛みが襲ってくるだろう。

その痛みが来るのが待ち遠しい。笑い声はようやく弱々しい音として喉から出てきた。

冷たい地面に頬をこすりつけながら、霞んではつきりとしなない視界の端で人影が見えた。恐る恐るという感じに、こちらに近づいて「大丈夫？」と問いかけてくる。

僕はかすかに口を開いた。

「お前らが大嫌いだ」

きつと目の前の少女には届いていない。それでも彼女の怯える顔を見て満足する。視線を天井に戻すとぼんやりする視界のなか青紫の太陽が微笑んでいた。

## 青紫の太陽10終（後書き）

未熟な作品ですが最後までご拝読ありがとうございました。短い期間でしたが今回の投稿で学ぶことは多かったです。最後に一言でも構いませんので感想をいただければ幸せになれます。

明日からは「閃光少女」を投稿していきます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8464o/>

---

青紫の太陽

2010年11月21日15時13分発行